

プログラム・ノート～『メサイア』の歌詞と音楽の魅力

藤原 一弘

歌詞編者チャールズ・ジェネンズ

ヘンデルの『メサイア』は、1742年4月13日にダブリンで初演されて以来、今日に至るまで途切れることなく演奏され続けるオラトリオの傑作です。「メシア（英語のメサイア）」とは、「油を注がれた者」つまり神により選ばれ即位した王という意味のヘブライ語の言葉であり、そのギリシャ語訳は「クリストス＝キリスト」です。神から選ばれて平和をもたらす存在であるメシアは、旧約聖書ではやがて来たる存在として待望され、新約聖書ではイエスこそメシアであるという信仰が宣教の中心でした。『メサイア』の歌詞編者チャールズ・ジェネンズは、メシアとその信徒の姿を3部に分けて描き出しました。第1部はメシアの預言と降誕を、第2部はメシアの受難と死、復活、昇天、信徒との婚宴（ハレルヤ）を、最後の第3部はメシアを信ずる者たちの永遠の命を扱っています。当時のイングランドでは、信仰より理性を重んじ預言や奇跡など存在しないと主張する「理神論」が広まっていましたが、英國国教会の熱烈な信徒であったジェネンズは、理性では理解できなくとも信仰によって知りうる神の摂理を伝えるべく、『メサイア』の第1部と第2部では主として旧約聖書の、第3部では主に新約聖書の言葉を巧みに選び出し、メシアとその信徒の壮大なドラマを築き上げました。『メサイア』の歌詞の前に置かれた言葉（歌詞対訳冒頭を参照）には、ジェネンズの思いが要約されています。まず、「偉大なる出来事を歌おう」に始まる古代ローマの詩人ウェルギリウスの『牧歌』第4歌は、中世以来キリスト教社会では異教徒によるキリスト誕生の預言と捉えられていました。また、続く使徒の手紙の言葉には、信仰は理性によるものではなく「奥義 mystery」であると記されています。つまり、これから始まる『メサイア』は、理性では把握できないメシアとその信徒の大いなる物語であると、聴衆に伝えているのです。

受難表現に見るヘンデルの創意

こうしたジェネンズの思いが込められた歌詞に、ヘンデルは全曲が聴きどころと言つても過言ではないほど見事な音楽を作曲しました。高校1年まで器楽曲にしか興味がなかった私が、声楽曲の魅力の虜になったのも演奏会で聴いた『メサイア』のお陰です。そんな私が強烈な魅力を感じるのは、第2部の受難を扱う部分における考え方抜かれた卓抜な創意の数々です。たとえば、キリストの受難を通じての贖罪を預言する言

葉と解されている旧約聖書「イザヤ書」53章の言葉を歌う第20曲のアリア「彼は蔑まれ」では、アルトが「痛み grief」という歌詞を歌う箇所で通奏低音の奏する変口音上に変ハ長調の長三和音(c b - e b - g b)が重ねられ、痛々しくも美しい不協和音が聽かれます。これはキリスト(Christ)を象徴するハ長調(C Major)の長三和音(c - e - g)を半音下げるにより、メシアの受難を象徴しています。この変ハ長調の和音は、ヘンデルと同じ年に生まれたJ. S. バッハの作品にも見ることができます。一つは、キリストの受難を歌うコラール「おお人よ、汝の大いなる罪を嘆け O Mensch, bewein dein Sünde groß」に基づく同名のオルガン・コラールBWV 622に見られます。バッハは、元となるコラール第1節の最終行で「十字架 Kreuze」の語が歌われる箇所に変ハ長調の和音を置き、キリストの十字架上の死を象徴的に表現しています。バッハがこの和音を用いたもう一つの例は、カンタータ第22番『イエスは十二弟子を引き寄せ Jesus nahm zu sich die Zwölfe』BWV 22の第2曲です。このアルトのアリアで、キリストの「受難 Leiden」という言葉が歌われる箇所でも、実に唐突に変ハ長調の和音が現れます。この様に、ヘンデルにおける受難の「痛み」、バッハの「十字架」と「受難」と、いずれもメシアの受難を表す言葉が現れる箇所で変ハ長調の和音が用いられていますが、ヘンデルの例がキリストの痛みを聞き手に実感させる効果を挙げているのに対し、バッハによる2つの例は驚きを伴う強烈な違和感を感じさせます。2人の作曲家は、メシアの受難という異常な事態を実際にバロック的な手法を用いて表現していると言えるでしょう。

もう一箇所、『メサイア』で受難を歌う一連の曲の中でもヘンデルが見事な手腕を示しているのは、第21曲の合唱「たしかに彼は私達の痛みを負い」と第22曲の合唱「彼の傷によって私達は癒された」です。第21曲は、キリストの受けた激しい鞭打ちを表すオーケストラによる付点リズムに始まり、彼が「傷つき……打たれた」のは私達の「背き」と「咎」ゆえであることを激しい不協和音で表しますが、実にヘンデルらしい力強く具象的な音楽です。さらに罪なきキリストが罪人の身代わりに「懲らしめ」を受け、われらには「平安」が与えられたと、受難による贖罪で神と人との主客の逆転という、キリスト教の教義上、重要な主題が極めて劇的に歌われます。ここから間髪を入れずに開始される第22曲は一転してルネサンスの声楽ポリフォニーを模したフーガとなり、今一度、無垢なるキリストの受難により人間は罪から解放されたという、救済史の核心とも言うべき歌詞が歌われますが、ヘンデルによる創意の結晶とも言えるのは、歌詞を反映したフーガ主題です。歌詞は、キリストの受難を意味する「彼の傷によって」と歌う前半と、人間の罪からの解放を伝える「私達は癒された」という後半に二分され、

それぞれは意味において対照をなしています。メシアの受難を歌う主題の前半は、長3度—完全4度—減7度と徐々に音程を広げる跳躍によってジグザグを描き、最後の不協和な減7度の下方への跳躍は「彼の傷」という、まさに受難を象徴する言葉に当てられています。これに対し、受難による罪の許しを歌う主題の後半は、ヘ短調の音階の前半を順次進行で完全5度上行する旋律からなっています。メシアの受難と人間の罪の許し、メシアの受けた傷と人の癒しという対照的な歌詞が、跳躍、中でも不協和な下方への跳躍(減7度)と協和的な上方への順次進行(完全5度)という対照的性格を持つ旋律によって音楽として見事に造形されています(譜例)。

最後に、旧約聖書の「哀歌」の言葉で、受難のキリストの計り知れぬ悲しみを見よと歌う第27曲のアリオーソ「見よ、彼の悲しみに」を紹介しましょう。ここでは、あたかも力なくため息をついているかのように、通奏低音がc-H(ドーシ)とソフトで静かな音楽上の区切りを形作るフリギア終止がわずか15小節の間に3回、しかも同じ調で現れます。これは、ルネサンス末からバロック時代において「悲しみ」を表現する際に用いられた終止法です。ヘンデルは、慰める者もなく孤独に死にゆくイエスの悲しみを、3度繰り返されるフリギア終止で見事に表現したのでした。

決して音楽の質を下げることなく、誰もが理解し楽しめる音楽を書き上げるという難題を見事な手腕で解決し得たヘンデル。そして彼に創意に満ちた作曲への刺激を与えたジェネンズの聖書への深い造詣と篤い信仰。彼らの職人芸的な技と独創性の集大成とも言うべき『メサイア』の、初演から300年近くを経てなおその魅力を失わない歌詞と音楽の魅力を、皆様が今日のバッハ・コレギウム・ジャパンによる演奏によって存分に味わうことができるよう、願ってやみません。